

令和5年度 研究報告書

令和の日本型学校教育を視座とした学校経営

～21世紀型教育プロジェクトの取組み～

指導教員 黒山竜太 准教授
 浦川健一郎 シニア教授

令和2年度入学
熊本大学大学院 教育学研究科
教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース
200-A9708 深川 明花

目次

1.はじめに	4
1.1 研究の背景	
1.2 令和の日本型学校教育	
2. 21 世紀型教育プロジェクト	5
2.1 K 高等学校の教育改革	
2.2 探究学習の全体構想について	
2.3 資質・能力の策定について	
3.教育実践について	11
3.1 スキルラーニングについて	
3.2 キャリア探究Ⅰについて	
3.3 キャリア探究Ⅱについて	
4.コンピテンシーの分析について	19
4.1 アンケートについて	
4.2 アンケート分析について	
5.おわりに	27
引用・参考文献	

令和の日本型学校教育を視座とした学校経営

～21 世紀型教育プロジェクトの取組み～

令和 2 年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース

200-A9708 深川 明花

研究報告書要旨

Society5.0 時代の到来や変動が激しく、予測不可能で複雑な問題を抱える VUCA 時代を
生きている子どもたちは、学校教育の中で自分らしく、より良く生きていくための資質・能
力を育んでいく必要がある。このような背景を受け、中央教育審議会は、令和 3 年 1 月に
「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」という「令
和の日本型学校教育」について示した。そして、この答申を受け、筆者が勤めている K 高
等学校では、通信制高校のメリットを生かしながら、「21 世紀型教育プロジェクト」として、
教育改革を実施した。

本研究では、教育改革での自身の役割、資質・能力の策定や構想を形にしていくまでの
過程、実際に改革を経た教育実践を受けた生徒たちの姿を見取っていく。

21 世紀型教育プロジェクトにて、筆者は探究学習チームのメンバーとして教育改革に携
わってきた。まず着手したことは、3 年間を通した体系的な探究学習のプログラムを組んで
いくことであり、スキルラーニングやキャリア探究Ⅰ～Ⅲとプログラムを組んでいった。次
に着手したことは、生徒に育んでほしい資質・能力を策定することである。探究学習メンバ
ーと会議を重ね、「CLARK Key Competencies」として定めていった。

そして、これらの教育改革を受け、筆者の所属する熊本キャンパスにて、地域や社会の課
題解決に向けた探究学習を展開していった。その中で体験的な学びを通し、生徒たちが資
質・能力を育んでいき、自走し学んでいく姿を見取っていくことができた。

これからの学校経営は、資質・能力をベースとしながら生徒だけでなく教職員も自分らし
く、たくましく活躍していけるように、教職員と生徒が共に成長する「共育」を目指してい
く必要がある。

【キーワード】 令和の日本型学校教育、探究学習、資質・能力、学校経営

1.はじめに

1.1 研究の背景

現代は、Society5.0 時代の到来や変動が激しく、予測不可能で複雑な問題を抱える VUCA 時代（Volatility 変動性・Uncertainty 不確実性・Complexity 複雑性・Ambiguity 曖昧性）と呼ばれている。これからの学校教育では、このように急激に変化する時代の中で子どもたちが自分らしく、より良く生きていくための資質・能力を育んでいく必要がある。

筆者は、広域性通信制高校に勤めている。通信制高校は、面接指導や添削課題の提出等により、全日制課程よりも法的に定められている授業日数が少なく、日々の学習に関しては、柔軟なカリキュラムを組むことができる。その為、筆者が勤めている K 高等学校では、時代のニーズに合わせたコースを設置している。例えば、探究授業を軸とした総合進学専攻や e スポーツ専攻など、特色ある教育を展開している総合進学コースやオンライン授業と対面授業を自由にカスタマイズし、自分だけの時間割を作ることができるスマートスタディコースなどがある。本研究では、このような通信制高校のメリットを存分に活かした未来を見据えたカリキュラムマネジメントに基づく授業展開、及び学校経営に資する取組みについて述べていく。

1.2 令和の日本型学校教育

中央教育審議会は、令和 3 年 1 月に「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」という「令和の日本型学校教育」について示した。ここでは、2020 年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として、「①個別最適な学び」と「②協働的な学び」の在り方について示された。個別最適な学びでは、「指導の個別化」と「学習の個性化」を図っていき、「子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲を踏まえてきめ細かく指導・支援」していくことや、「子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるように促していく」必要があると述べられている。また、「個別最適な学び」が「孤立した学び」にならないように、「探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら」、「必要な資質・能力を育成する」ための「協働的な学び」を充実させることの重要性も述べられている。そして、「それぞれの学びを一体的に充実し「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる」ことが重要であると示された。

2. 21 世紀型教育プロジェクト

2.1 K 高等学校の教育改革

K 高等学校では、この答申を受け、「自律的学習者の育成」という目標のもと、個別最適な学びと協働的な学びを実現すべく「K が目指す 21 世紀型教育」を打ち出していった。この教育改革を通して、確かな学力を育みつつ、非認知能力を向上させていき、未来の社会で活躍できる人材の育成を目指していった。そのために、個別最適な学びでは、「指導の個別化」としてコーチングやリフレクションを通して、一人一人に合わせた指導を実現し、「学習の個性化」では、学習教材であるウイングネットを活用した学びのあり方を実践している。また協働的な学びでは、探究を軸にして、「総合的な探究の時間」や「教科探究」のプログラムを組んでいる（図 1）。

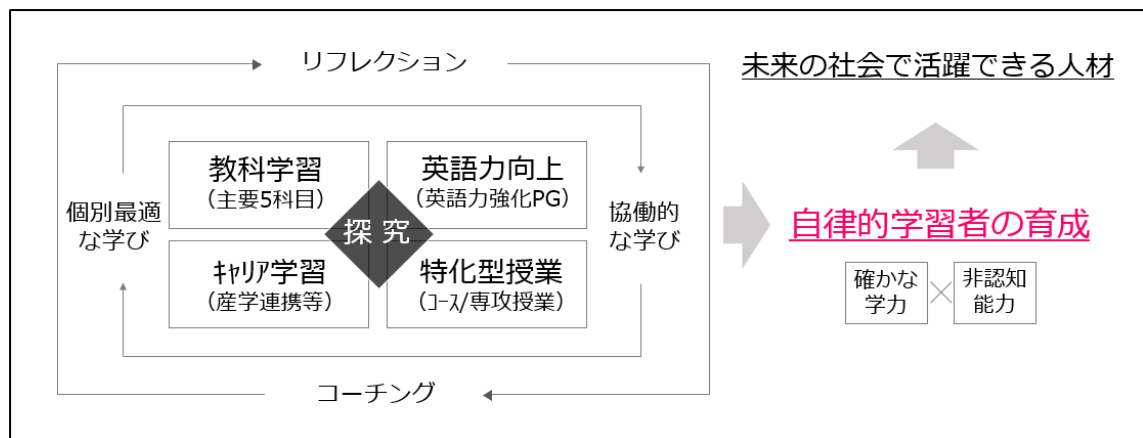


図 1 21 世紀型教育のカリキュラム図

筆者は、令和 4 年度、この 21 世紀型教育プロジェクトの探究学習チームのプロジェクトリーダーとして、この改革に携わり、生徒たちの育むべき資質・能力の策定や探究学習の構想、教材の作成、組織作りを行っていった（図 2）。本研究では、教育改革での自身の役割、資質・能力の策定や構想を形にしていくまでの過程、実際に改革を経た教育実践を受けた生徒たちの姿を見取っていく。

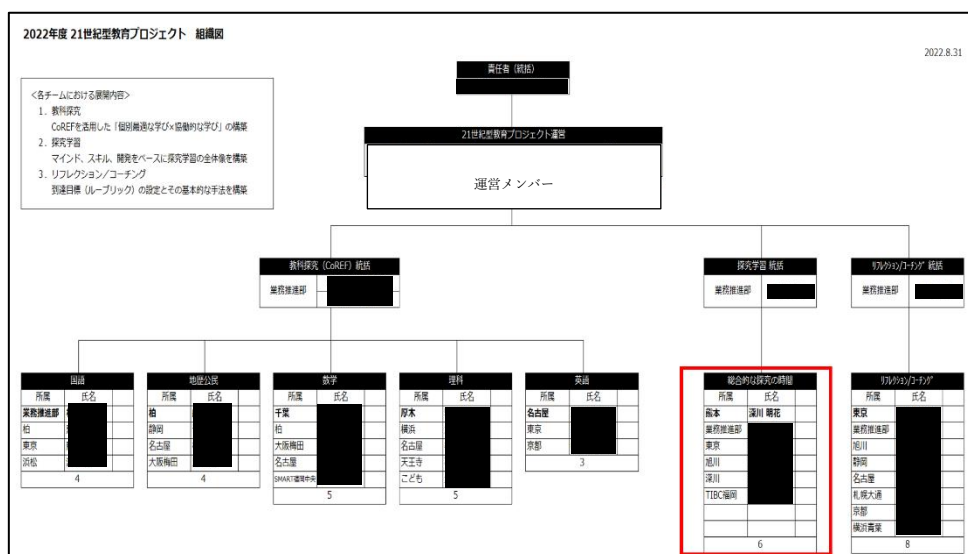


図2 21世紀型教育プロジェクト 組織図

2.2 探究学習の全体構想について

21 世紀型教育プロジェクトの探究メンバーとしてまず取り組んだことは、3 年間を通して体系的な探究学習のプログラムを組んでいくことである。もとより K 高等学校では、キャリア学習Ⅰ・キャリア学習Ⅱというプログラムがあった。キャリア学習Ⅰは「思考力・判断力・表現力・主体性・協働性・多様性」を6のスキルとし、それぞれのスキルがどのような力なのか、ワークを通して学んでいく教材である。キャリア学習Ⅱでは、探究を深めていくツールを活用しながら、各キャンパス（K 高等学校は広域性通信制高校のため、各都道府県に校舎が設置されている）の特色を生かした実践的なプログラムである。

今回の教育改革では、これらのプログラムを再構築していった。まずは、1 年次に探究を学ぶ土台作りとしてスキルラーニングを行っていく。スキルラーニングでは、生徒が育むべき、資質・能力を意識化していくことを目的とし、ワークを通して未来の社会で必要となる資質・能力について学んでいく。このスキルラーニングと並行し、キャリア探究Ⅰとして、教育と探求社の教材であるクエストエデュケーションコーポレートアクセスコースを導入していった。このコーポレートアクセスコースでは、生徒は実在する企業のインターン生として、企業から出される答えのないミッションに応じていく。統一教材を導入することで、探究学習をファシリテートしていく教員にとって進めやすいものになっている。また生徒に関しては、プログラムの中で探究学習の進め方に関するガイダンスを受けることができるため、これから探究学習を進めていく上での基礎基盤を築くことができる。そして、何よ

りも実在する企業と繋がっていくことで社会との繋がりを意識していくことができる教材となっており、キャリア探究Ⅰの教材として、全国導入を決定した。2年次から実施するキャリア探究Ⅱでは、各キャンパスの地域性に特化しながら、生徒の「問い」にフォーカスし、授業を展開していく。このキャリア探究Ⅱでは、より一層生徒の主体性が求められていくプログラムとなっている。最後にキャリア探究Ⅲでは、2年次後半から3年時にかけて進路を見据えつつ、個々で課題や目的を設定し取り組んでいくプログラムで、これまでの探究学習を総まとめしていく意味合いもある。このように、3年間を通して、段階を踏みながら探究学習を進めていくことができる全体像（図3）を構築していった。

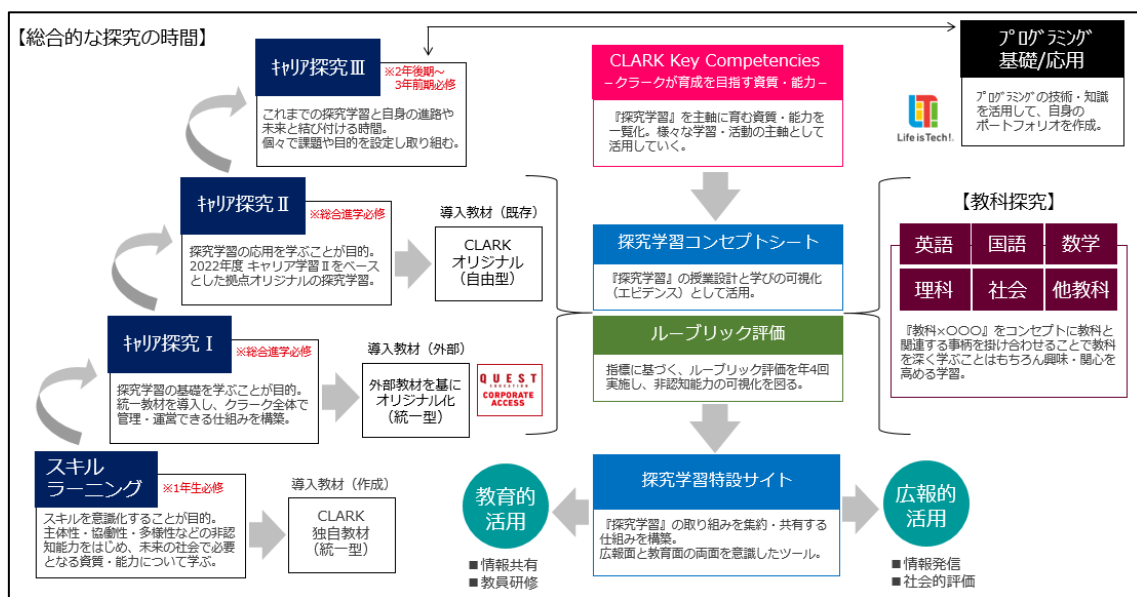


図3 探究学習全体像

2.3 資質・能力の策定について

21世紀型教育プロジェクトを進めていくにあたって、生徒が育むべき資質・能力を策定していった。策定方法としては、令和4年10月から11月にかけて探究チームにて会議を重ねていき、これからの社会で必要になってく資質・能力とは何かを議論し、絞り込みをしていった。その際、参考としたものとして、文部科学省の「これからの時代に求められる「生きる力」、経済産業省の「人生100年時代の社会人基礎力」、世界経済フォーラム「2025年以降に必要とされる10種類のビジネススキル」やオックスフォード大学「2030年に必要とされるスキル」、OECD「ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」などが挙げられる。これらを参考にしながら、「CLARK Key Competencies」として定めていった。「CLARK Key

Competencies」(以下より 15 のコンピテンシーと記述)は 3 つの柱に分類されている。それが、「人間力」・「探究力」・「創造力」である。「人間力」の中には、人間関係形成力・コミュニケーション力・メタ認知力・やり抜く力・レジリエンス、「探究力」には、学びに向かう力・考える力・読み解く力・情報編集力・戦略的学習力、「創造力」には、ビジョン・価値を創造する力・課題発見解決能力・省察的实践力・エージェンシーを分類していった。そして、これらの資質・能力を教育的・社会的に広く認知させることを目的に、育成を目指す資質・能力をロゴ化(図4)することで総体的な繋がりを演出していくこととした。

図4 15 のコンピテンシーのロゴ化



次に、生徒への意識化を図っていくために、令和4年12月から令和5年3月までスキルラーニングの教材づくりに着手していった。教材は探究メンバーで振り分け、それぞれ作成後、全体ですり合わせを行っていった。教材を作っていく上で、コンピテンシーの定義をしっかりと理解していきながら、楽しく学べるようにワークを設定していくなど工夫を凝らしていった。例えば、コミュニケーション力では、「自分が思っていることや言いたいことを正確かつ論理的に分かりやすく伝え、相手に好感を持ってもらえるように、傾聴や相手の意図、感情を理解し配慮できる力」と定義し、伝達力と傾聴力に着目したワークを設定した(図5)。更にすべてのコンピテンシーの教材の中に共通事項として、自分の意識の中、学

校生活の中、社会の中でどのようにして、そのコンピテンシーを生かしていくのかということを考えさせるワークを取り入れていった。このようにして、スキルラーニングの教材が完成し、令和5年4月に全国キャンパスへ配信をしていった。配信をする際は、それぞれのキャンパスの教員が円滑に授業を進めていくことができるように、コンピテンシーの根拠一覧を記載したスキルラーニング指導計画（図6）や解説動画を一緒に配信していった。

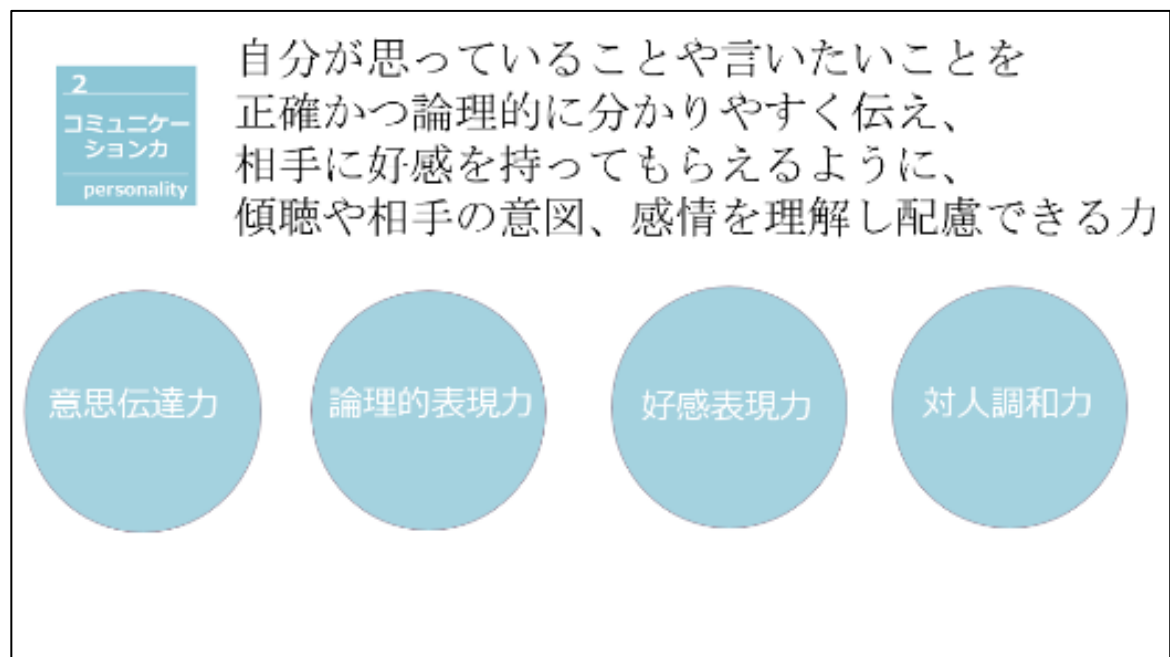


図5 スキルラーニング教材一例「コミュニケーション力」

月	スキル	コンピテンシー	内容	他教科・教育活動への 関連的な指導提案	主となるコンピテンシー参考（※）
5 ・ 6 ・ 7	人間力 personality	人間関係形成力	自分を大切にするとともに、多様な意見や立場を理解しながら他者と関係性を築いていく力	キャリア探究Ⅰや他のグループワークにおいて、チームビルディングを意識付けしていく。	中教審「キャリア教育」基本的・汎用的能力 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2012/05/21/1320712_04.pdf
		コミュニケーション力	自分が思っていることや言いたいことを正確かつ論理的に分かりやすく伝え、相手に好感を持ってもらえるように、傾聴や相手の意図、感情を理解し配慮できる力	ピアアシスタントにおける、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション、傾聴のスキルと関連付ける。	経済産業省「社会人基礎力」 https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf
		メタ認知力	自らの認知（考え・感じ方・判断）を客観的に見て、その情報を課題解決につなげる力	ピアアシスタント（自己理解）エゴグラムの活用とコーチング面談にて、自己の課題を整理する。	文部科学省「新学習指導要領」 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afiedfile/2018/09/14/1408677_1.pdf
		やり抜く力	自己・他者・物事に対して責任感を持ち、失敗を恐れず挑戦し、最後までやり遂げる力	やり抜くための具体的行動をコーチング面談の中で共有し、見取っていく。	ペンシルベニア大学 アンジェラ・リー・ダックワース「GRID」 https://www.ted.com/talks/angela_lee_duckworth_grit_the_power_of_passion_and_perseverance/transcript?language=ja
		レジリエンス	困難な状況やストレスに対して、しなやかさを持って適応していく力	コーチング面談にて、悩み・不安なことに対してどのように乗り越えていくか共有していく。	教育心理学年報 小林 朋子 https://www.jstage.jst.go.jp/article/arepi/60/0/60_155/_pdf/-char/ja ベネッセ教育情報 https://benesse.jp/educational_terms/7.html
8 ・ 9 ・ 10	探究力 inquiry	学びに向かう力	主体的に学習に取り組んでいき、学ぶ意義を考えることができる力	コーチング面談にて、目標に対してどうして学んでいきたいのかを明確にする。	文部科学省「新学習指導要領」 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afiedfile/2018/09/14/1408677_1.pdf
		考える力	論理的・批判的思考力や物事を多面的・多角的な視点を持って、深く考えることができる力	キャリア探究Ⅰ・Ⅱにおける、提案を考えていく際、多面的・多角的視点を意識させる。	文部科学省「新学習指導要領」 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afiedfile/2018/09/14/1408677_1.pdf
		読み解く力	他者の意見や提示されたことを正しく読み解き、理解する力	論理Ⅰの意識づけ、再度読み解く力の重要性を伝える。	国立教育政策研究所PISA調査「読解力」 https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01_point.pdf
		情報編集力	多様な情報の中から必要な情報を取捨選択し、情報と自身の知識や経験を繋ぎ合わせる力	各授業や探究学習の情報収集の中で、ただ調べたことをコピペするのではなく、自身の知識や経験を繋ぎ合わせ、情報を多面的多角的に分析できるようにする。	藤原和博「情報編集力」 https://globis.jp/article/6566
		戦略的学習力	状況に応じて最適な学習内容や学習方法を選択し、実践できる力	自身のリフレクションシートを見返し、戦略的にしているかを確認する。	オックスフォード大学「2030年に必要とされるスキル」 https://megaplus.ban-zan.com/trivia/p6995/
11 ・ 12	創造力 creativity	ビジョン	未来の自分と社会を想像し、将来のあるべき姿を描き、より良く生きていく力	自分のあるべき姿、ありたい姿を描くことで、コーチング面談時の指標となり得る。また、キャリア探究Ⅱにおいても、探究活動を進める上で軸となる。	OECD Education 2030 プロジェクト https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf
		価値を創造する力	多様な知識・知恵・個性を掛け合わせ、新たな価値の創造と未来を創る力	キャリア探究Ⅰ・Ⅱにおいて、課題を解決する際に、既存の概念を超えた新しいアイデアを生み出すための礎とする。	経済産業省「社会人基礎力」 https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf
		課題発見・解決能力	自身や社会の課題を見出し、解決へと導いていく力	キャリア探究Ⅰ・Ⅱにおいて、自ら問を立て、その解決策を考えるための基礎力となる。	経済産業省「社会人基礎力」 https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf
		省察的実践力	トライ＆ランを繰り返し、未来社会をよりよくしていくために果敢に実践する力	試行→分析→修正→再試行のサイクルを知る。それにより、キャリア探究Ⅰ・Ⅱにおいて、より精度の高い探究ができるようになる。そのための基礎知識である。	OECD Education 2030 プロジェクト https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf
		エージェンシー	社会の当事者として変化を起こすために、主体的に目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する力	コーチング面談では、目標を設定し、その目標に沿って主体的に行動するための礎となる。また、キャリア探究Ⅰ・Ⅱにおいては、当事者意識を持ち社会課題に対して取り組む姿勢へとつながる。	OECD Education 2030 プロジェクト https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf
※キーコンピテンシーは、それぞれの機関が打ち出したコンピテンシーを複合的に根拠・参考とし、クラーク記念国際高等学校探究科が独自に定めたものである。					

図6 スキルラーニング指導計画

3.教育実践について

ここからは、21 世紀型教育プロジェクトを受けて、筆者の所属する熊本キャンパスにて実施した教育実践について、探究学習を中心に述べていく。

3.1 スキルラーニングについて

まずスキルラーニングについては、作成した教材を基に、1・2 年生を対象に週 1 回の授業を実施していった。そして、コンピテンシーに関する自己評価のアンケートを 6 月と 12 月に実施し、日々の学校生活を送っていく中でどのようにコンピテンシーの成長を感じているのか測定を行った。

3.2 キャリア探究 I について

次にキャリア探究 I については、3 学年合同で実施をしていった。もとより熊本キャンパスでは、クエストエデュケーションのコーポレートアクセスコースを 9 年前より導入しており、毎年全国大会にも出場を果たしている。そのため、総合学習の全体像の中では 1 年次に必須で実施となっているが、今年度も例年通り全学年での実施をしていった。熊本キャンパスはコーポレートアクセスコースの伝統校とも呼ばれており、生徒たちはクエストへの取り組みに対する意識が非常に高い。また多学年によるグループ編成をしていくため、クエストを経験している上級生が下級生を引っ張っていく姿が見られていき、全チームが全国大会出場という共通目標のもと探究を進めていくサイクルができていく。

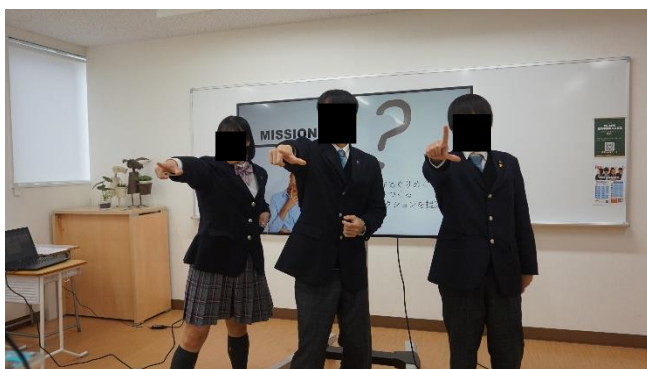


写真1 2023年度全国大会出場チーム



写真2 大和ハウス本社プレゼン

全国大会のエントリー前には、校内発表会を実施しアウトプットの場を設けている。この校内発表会では、クエストエデュケーションを主催している教育と探求社のエリア担当者の方や地元企業の方や行政の方などを招き、生徒のプレゼンテーションに対し講評をいただいている。その講評をもとに、生徒たちはプレゼンのブラッシュアップを行い、全国大会

へエントリーをしていく。このクエストの活動を通して、生徒たちの様々な成長が見られていった。1つ目はチームビルディングをしていく中で、「人間関係形成力」や「コミュニケーション力」を育てていく姿である。とあるグループは、3年生1名、2年生2名、1年生6名で編成されているチームだったが、最初は3年生の生徒と2年生の生徒が1年生達をまとめていくことに非常に苦労をしていた。しかし、グループワークを通し、お互いに信頼関係が生まれていき、それぞれの得意不得意を把握したうえで役割分担ができたことにより、校内発表会でも最優秀賞を受賞することができた。他のグループにおいても、意見の衝突など紆余曲折を経験しながら、最後には一致団結してプレゼンを作り上げていった。2つ目は、企業からのミッションに挑んでいく中で「考える力」や「情報編集力」、「価値を創造する力」、「課題発見・解決能力」が複合的に成長している姿が多く見られた。特に情報編集力では、まさに多様な情報の中から必要な情報を取捨選択し、情報と自身の知識や経験を結び合わせていき、アイデアを絞り出していた。例えば、キモノハーツのミッションに取り組んだグループでは、ペット用義肢と和服を掛け合わせて世界中を勇気づける新プロジェクトを提案するなどユニークなアイデアが生まれていた。

このように、キャリア探究Ⅰで導入しているクエストエデュケーションを通して、生徒たちは様々なコンピテンシーを育てている。



写真3・4 校内発表会の様子

3.3 キャリア探究Ⅱについて

次にキャリア探究Ⅱの活動について述べていく。キャリア探究Ⅱは2年生で実施をしている。地域連携を意識していきながら、生徒の問いや課題意識を重要視し、社会実装してい

く探究活動を目標としている。初回の授業にて、持続可能な地域づくりに向けてのマインドセットとして、未来に残したい熊本県の良い点と熊本の抱える課題点を考えていった。そして、その中から今年度生徒が取り上げていったことが、熊本県産のイ草・畳の減少問題とフードロス問題であった。この2つの課題について、2グループに分け、活動を行っていった。なお、外部のイベント等に参加する際はグループの枠を超え、2年生全体で取り組んでいった。

まずは熊本県産のイ草・畳の減少問題についての活動を紹介していく。この問題については令和4年度、キャリア学習Ⅱにて八代市役所や畳工業組合の方と連携をしながら、イ草・畳PRのために何ができるかということを探求していった。そして、最終的に子どもたちへPRしていくために、イ草・畳の良さを伝える紙芝居を作成していき、その成果発表をイ業三部会会議にて発表していったという流れがある。そのため、今年度は作成した紙芝居などを用いながら、イ草・畳のPRを社会実装していくこととした。まずは、生徒たちにイ草・畳の現状を調べさせたうえで、畳工業組合の副理事長であり畳店店主の方に、イ草・畳の現状について改めて講演をしていただき、更にこれからPR活動を行っていく上でのワークショップ設計についてもご教授いただいた。



写真5・6 ワークショップ設計について学ぶ姿

その後、ワークショップ先の選定とワークショップ設計案を作成していった。そして、第1回目のワークショップ先として、熊本市内にあるフリースクールにて実施することに決定した。対象は小学1年生～6年生の54名である。ワークショップの流れは以下の通りである。畳店の方から教わったワークショップの方法で設計を組み立てていった（図7）。

1. 紙芝居上演 (10 分)
2. 畳表を使ったコースター作り (60 分)
3. 休憩&片付け (15 分)
4. 交流会 (30 分) イ草粉を使ったお菓子とイ草茶を準備
5. 後片付け (5 分)

イ草・畳 PR のワークショップについて			
ワークショップ	イ草の会 ～触って作って楽しもう～		
氏 名 (企業名・担当者)	クラーク記念国際高等学校 2 学年	連絡先 (電話番号)	096-327-8323
当日同行する生徒人数	15 名～19 名	引率職員	2 名
時間	13 : 00～15 : 00	担当職員	深川 明花
使用希望場所	※該当する場所に○をしてください。 教室 調理室・校外・その他 ()		
【ワークショップの流れ】(120 分間) 1. 紙芝居上演 (10 分) 2. 畳表を使ったコースター作り (60 分) 3. 休憩&片付け (15 分) 4. 交流会 (30 分) イ草粉を使ったお菓子とイ草茶を準備 5. 後片付け (5 分) 1～3 年 : 25 名 4～6 年 : 29 名 ワークショップは三カ所で開催 《コースター作りの際に使用する材料》 ①畳表 (コースターの主材料) ②千代紙 (コースターの飾り・緑素材) ③接着剤 (千代紙を畳表に接着する時と、畳表の端のほつれ止めに使用) ④はさみ (千代紙を切るための道具) ⑤ボール紙 (千代紙を使う時に使う型紙) ⑥鉛筆 (切る目印などを描く道具) ⑦直定規 (目盛り付きの定規) ⑧綿棒・紙皿 (接着剤を使う時に使うモノ) ⑨古新聞紙等 (作業する机の上に接着剤が付かないように敷く) ⑩マスキングテープ (古新聞紙等を固定するために使う) 《交流会について》 ・イ草茶 ・イ草粉のカップケーキ (原材料: ホットケーキミックス・卵・砂糖・バター・牛乳・チョコチップ・イ草粉) ご準備いただくもの (当日、学校側でご準備いただく物) ・筆記用具 ・定規 (15 cm 程度の長さ) ・はさみ ・ゴミ袋 (紙くずや使用済みの綿棒・紙皿、古新聞等を入れる) お願い事項 交流会の際にイ草茶を入れるため、キッチンを使わせて下さい。			



図7 イ草・畳のワークショップ設計書

そしてこのワークショップに向けて、2年生全体で準備を進めていき、成功させていくことができた。ワークショップ後は振り返りアンケートを実施していった。質問項目は、「ワークショップの良かった点」、「ワークショップの反省点」、「ワークショップを通して学んだこと」の3点である。ワークショップの良かった点として、「うまく計画通り進める事ができたのでよかったと思います。」や「低学年の1～3年にはコースターが結構うけた。ケーキや、お茶も好評でおかわりもしていて良かった。」、「カップケーキも美味しかったのでい草の印象がプラスの方向に動いたはず」や「子どもたちに作業を教えるだけの方法は、いつくかあるけど、それだけだと、子どもたちとのコミュニケーションって取れないから実際に会って話すことは今回のワークショップで貴重な経験の一つになった点です。」という意見があり、それぞれの生徒が自分の役割に責任を持ち、準備した内容が小学生に好感触だったことに対しての意見が多く見られた。ワークショップの反省点としては、「高学年の子には、簡単すぎて暇をもて余してしまった。もっとコースターの材料を持って行って良かった。予想以上の大好評が仇となった。い草がとんがっており危なかった。もうちょい安全性を管理してから見せたり匂いを回でもらったりしたら良かったと思う。一定の子には、2センチ×9センチは難しそうだった。お手本の切ったものを待っていくべきだった。い草のお茶を冷やして持って行っても良かったと思う」や「ボンドで遊んだりして、備品を粗末に扱う子供もいたので、そこに配慮しておくべきだった」、「紙芝居の内容を変えることが必要かもしれない」など、次のワークショップに繋がっていく意見があった。最後にワークショップを通して学んだこととして、「子供達が興味をもってくれたことが一番嬉しかった。この活動を通して、分かりやすく説明する力や、主体的に行動すること、時に仲間との協力が大切だと学んだ。」という声があり、活動を通して様々な気づきを得ていることが分かる。



写真7・8 フリースクールでのワークショップの様子

このワークショップを終えた後は、文化祭に向けて、中高生やその保護者向けのワークショップを設計し、展示物やミニ畳表のキーホルダーづくり体験などを行っていき、自分たちにできるイ草・畳のPRを定期的に実施している。更に、令和6年1月には、「eスポーツ×イ草・畳」をテーマに宇城市が運営するeスポーツ施設である「うきのぼ」の1周年アニバーサリーイベントの一環で畳表の上でeスポーツカルタ体験を実施し、イベント全体で300人以上動員していった。



写真9・10 うきのぼ一周年祭イベントの様子

フードロス問題に関する活動では、まず熊本県庁の消費生活センターの方にフードロス問題に対する出前授業をしていただき、理解を深めていった。その中から、生徒たちはフードドライブという活動に着目し、実践していくこととなった。フードドライブとは「家庭で余っている食品を集めて、食品を必要としている地域のフードバンク等の生活困窮者支援団体、子ども食堂、福祉施設等に寄付する活動」（環境省HPより）のことである。生徒たちは、この活動が学校法人でほとんどされていないということに気付き、フードドライブ活動の認知をもっと上げていくとともに学校でも実施していきたいと行動を起こしていった。まずは、フードドライブをするために必要なことを詳しく知るために県庁へ行き、担当者の方からアドバイスをいただいた。



写真１１ フードロス問題の出前授業



写真１２ 県庁でのインタビューの様子

その後、フードドライブで集めた食品を集めていくフードバンクにて、地域の子ども食堂へ食品を送る仕分け作業をグリーンコープ熊本の春日店にて体験した。この体験から、子ども食堂などに食品を寄付する際の配慮事項やこの活動の意義を改めて生徒たちは学んでいた。そして、実際に文化祭にてフードドライブを実施し、食品を集めていくことができた。また文化祭では同時にフードロス問題やフードドライブをコンセプトとした脱出ゲームを実施し、この脱出ゲームが宇城市のeスポーツ施設であるうきのば責任者の方に評価され、イオンモール宇城でのイベント開催に繋がっていった。更に、文化祭で集めた食品の寄付先として、生徒自身が熊本県子ども食堂ネットワークの方に連絡を取っていき、熊本市内の子ども食堂でボランティアを体験し、そして集めた食品の一部も寄付していった。このように、フードロス問題を取り上げ、探究しているメンバーは、実際に現場に赴き活動を積極的に行っていた。現場の声に触れていくことで、課題意識をより一層深めている姿が見られている。



写真１３ コープ春日でのフードドライブ仕分け作業



写真１４ 子ども食堂でのボランティア活動

以上が、キャリア探究Ⅱの活動であるが、これらの活動を通して、2年生全体は集団としての成長が顕著に見られていった。例えば探究活動を行っていく中で意見の食い違いが起こった際は、相手の意見をしっかりと聞いたうえで自身の意見を述べていき、それぞれが納得する最適解を導き出そうとする姿勢があり、安心して意見が述べられる心理的安全性を醸成できていた。更に、授業時間内だけで探究活動をするのではなく、休み時間や放課後など必要な際は主体性を持って、全員が集まり活動していく姿が見られていった。このように、探究学習を通して、生徒たちが資質・能力を伸ばしていている実感があった。

熊本キャンパスでは2年生を中心として、探究活動で自走していく生徒が育っていると言える。その理由としては、まず生徒たちの中で探究を学ぶ目的・意義が共有できているからである。そして探究を通して進路目標を達成し、飛躍していている先輩たちの姿や外部からの評価で自信がついた経験も大きな理由となっているのではないだろうか。また、筆者は探究学習を担当しているが、その際はサーバントリーダーに徹していき、生徒が自走しやすい環境づくりをしている。更に探究授業をする際は以下の5つの事を心掛けていくようにしている。

①生徒の力を信じる

答えがないので不安だが、生徒からの「問い」を大切にすること。

②探究活動では生徒とフラットに

一緒に調べ、一緒に学び、一緒にやって、一緒に挫折すること。

③合言葉は「いいね」「楽しそう」「なるほどね～」

生徒から出てきた意見は宝物、否定は絶対にしないようにし、的確な（生徒が納得できる）アドバイスをする。

④我先にアクション

授業のライブ感を大切に。教員が率先してスピード感をもって行動する。

⑤アウトプットの場の創出

外部評価は何よりも自信につながるため、成果発表は外部の方を招く。

筆者は、生徒に探究授業を通して、地域の課題や社会の課題を自分事と捉え、その課題の解決に向けてアクションを起こしていく人材に育ててほしいと願っている。

4.コンピテンシーの分析について

4.1 アンケートについて

15 のコンピテンシーの自己評価に関して、6 月と 12 月にアンケートをフォームズで実施した。日々の学校生活や探究活動、学校行事を通して、コンピテンシーの自己評価がどのように変化していったかを見取っていく。対象は 1 年生と 2 年生であるが、事前と事後にて、転入生やコース変更により生徒人数が変動しているため、前後回答の対応がある 1 年生 21 名と 2 年生 15 名に対して分析を行っていった。アンケートは本部探究科職員が作成したものを使用している。アンケート項目は「まったくそう思わない」を「1」、「とてもそう思う」が「5」とし、5 段階評価で回答していく。

《アンケート項目》

【人間関係形成力】

Q.1 自分のことを大切だと思う

Q.2 自分は多様な意見や立場への理解がある

Q.3 自分には他者と関係性を築く力がある

【コミュニケーション力】

Q.4 自分には聞く力がある

Q.5 自分には伝える力がある

Q.6 自分は相手に好感を持ってもらえるような接し方ができている

Q.7 自分には相手の感情を理解できる力がある

【メタ認知力】

Q.8 自分は自分の考え方・感じ方・判断のしかたにいつも似たような傾向があると理解できている

Q.9 自分は自分の考え方・感じ方・判断のしかたを課題解決につなげることができる

【やり抜く力】

Q.10 自分は努力家である

Q.11 自分は挫折してもめげないし、簡単にはあきらめない

Q.12 自分は一度始めたことは必ずやり遂げる

Q.13 自分は勤勉である

Q.14 自分は挫折を乗り越えた経験がある

【レジリエンス】

Q.15 自分はストレスに強い

Q.16 自分は困難な状況でも楽観的に捉えることができる

Q.17 自分にはしなやかさがある

【学びに向かう力】

Q.18 自分は学習について主体的だ

Q.19 自分は自分の学びの意義を考えることができる

【考える力】

Q.20 自分は論理的思考力がある

Q.21 自分は物事を批判的に考える力がある

Q.22 自分は物事を多面的・多角的に考えることができる

Q.23 自分は物事の本質を深く考えることができる

【読み解く力】

Q.24 自分は読解力がある

Q.25 自分は文章や会話を要約して話すことができる

【情報編集力】

Q.26 自分は多様な情報の中から自分に必要な情報を抜き取る力がある

Q.27 自分は多様な情報と自分の知識や経験をつなぎ合わせることができる

【戦略的学習力】

Q.28 自分は自分の学習内容について得意・不得意を把握している

Q.29 自分は自分の学習をどうやって進めていけばいいのかという方法をいつも考え実践している

【ビジョン】

Q.30 自分はなりたい自分をイメージすることができる

Q.31 自分は社会に貢献できる人材になれる

【価値を創造する力】

Q.32 自分は新しいアイデアを出すのが得意だ

Q.33 自分は新しい価値やアイデアこそ未来を変える力だと思っている

【課題発見解決能力】

Q.34 自分は自分自身の課題が何であるか理解している

Q.35 自分は社会課題を自分事として捉えることができている

【省察的实践力】

Q.36 自分は「失敗」＝「うまくいかないことが分かった」というように肯定的に捉えることができる

Q.37 自分はうまくいかないことでも何度もチャレンジすることが大切だと思っているし、実際にめげずにチャレンジし続けている

【エージェンシー】

Q.38 自分は社会の当事者である

Q.39 自分は目標を設定し、その目標に向けた振り返りをいつも行っている

Q.40 自分は目標達成に向けた行動ができている

4.2 アンケート分析について

1) 1年生全体

大きな変化はないが、事前よりも数値がやや低くなっている。学校生活への慣れや事前回答時よりも学年の課題が見えてきたことにより、数値が低くなったのではないかと考えられる。1年生はスキルラーニングなどを通して、コンピテンシーを意識付けしている段階にある。また外部連携などの機会も2年生と比べ少なかったことも、コンピテンシーの伸びに繋がらなかった要因ではないだろうか。

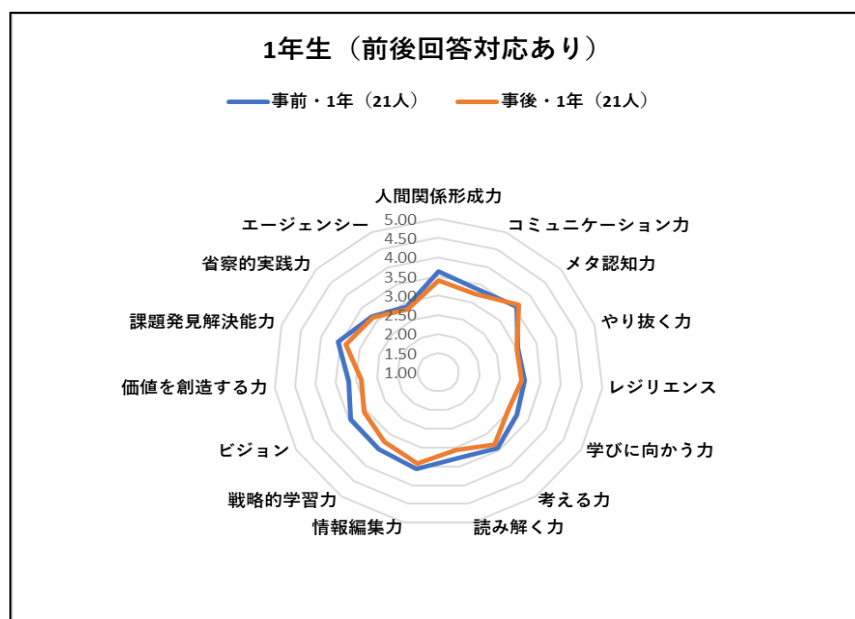


図8 1年生全体

2) 2年生全体

全体的に事前よりもやや数値が高くなっているが大きな変化は見られなかった。しかし人間関係形成力（+0.42）と学びに向かう力（+0.5）は全体と比較すると伸びが見られた。2年生は、集団としての習熟度が高い学年であり、互いを思いやり、励ましながら日々の学校生活を送っている姿が見受けられる。また、キャリア探究Ⅱやそれぞれの専攻授業などを通して地域の方や企業の方など外部と連携する機会が多く、外部評価を高くいただいたことが学年全体の自己肯定感や団結力を高めることに繋がっていったと考えられる。また、様々な活動に対し、教員の指示なく、主体的に活動を行う姿が多々見られ、「学びに向かう力」に関しては高まりを実感している。

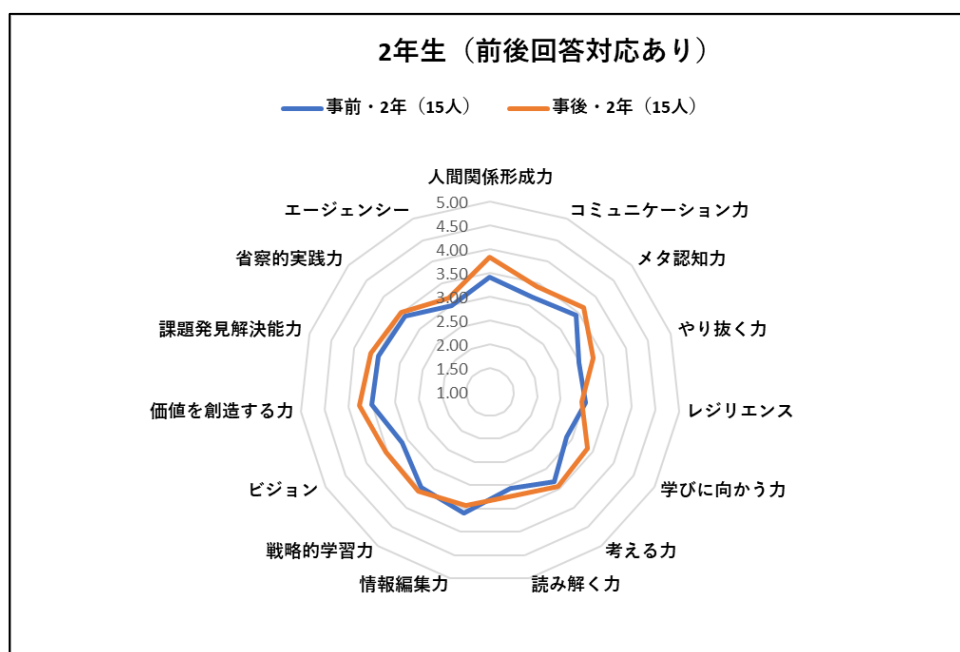


図9 2年生全体

3) 個人別分析

・生徒 A（2年生）（+1.47）

もともと自己肯定感が低い生徒だったが e スポーツ専攻にて、うきのばのイベントやボランティアに参加していき、リーダー的な役割を担うようになっていった。また、い草のワークショップにおいても、積極的に企画運営に関わり、周囲への役割分担や企画会議の司会などを率先して行っている姿が見られた。このように、責任のある立場を経験しながら、成功体験を積み重ねていくことで自己肯定感が高まり、全体的にコンピテンシーが向上していったと考えられる。

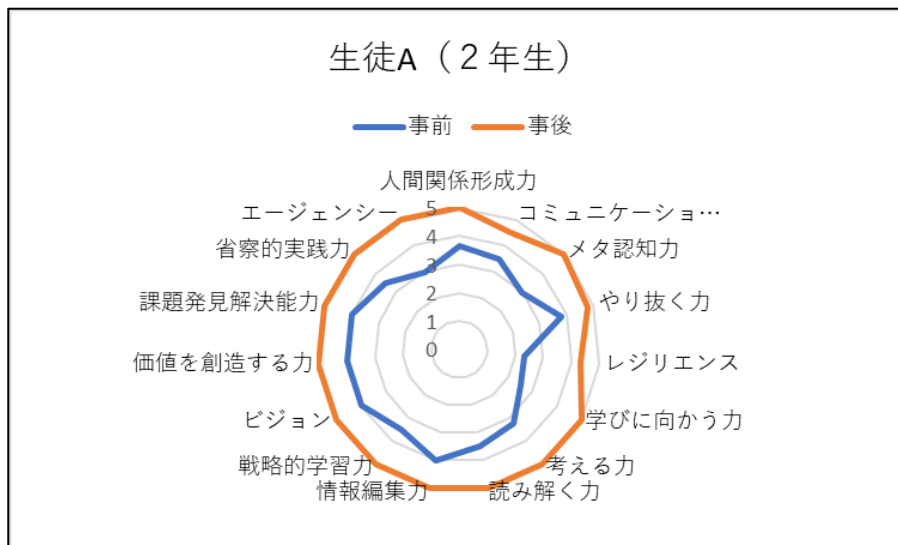


図10 生徒A

・生徒B（2年生）（+0.85）

イラストが得意であり、文化祭にてフードロス削減のためにオリジナルキャラクター作成やフードドライブ周知のための校内チラシを作成した。うきのば1周年アニバーサリーでもイベントチラシ作成に携わっている。自分の得意を生かし、役割意識をもって活動していくことができた結果、「学びに向かう力」や「考える力」、「読み解く力」、「価値を創造する力」の数値の高まりが顕著となっている。

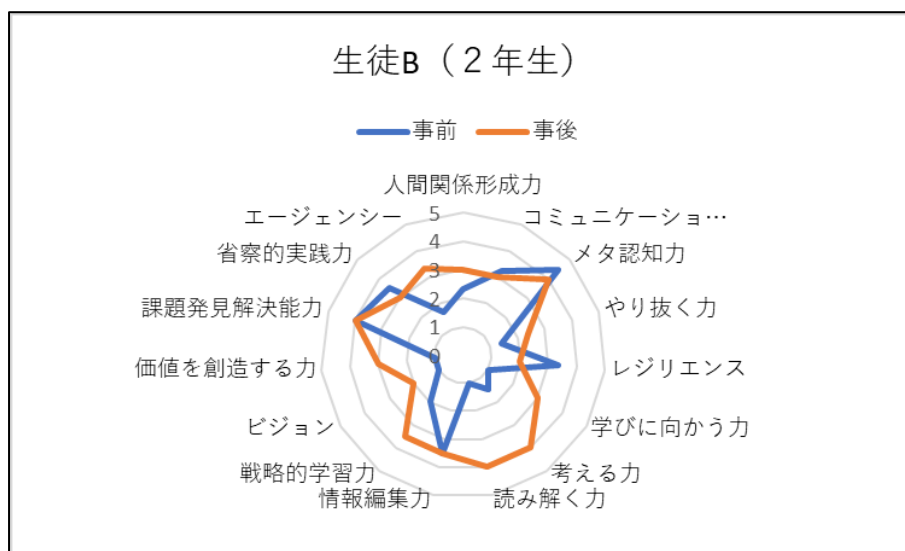


図11 生徒B

・生徒C（2年生）（+0.77）

学年全体の様子を俯瞰的に見て行動することができる生徒なため、周囲からの信頼も厚

い。後期からは生徒会に立候補し副会長を務めている。探究活動の中では、物事の本質を常に考えながら意見を述べていく姿が多く見られた。特に「メタ認知力」、「レジリエンス」、「戦略的学習力」、「ビジョン」の数値が顕著に伸びており、生徒会活動や探究活動を通して、自身の役割や目標が明確になってきたことにより、コンピテンシーの向上が見られていったと考えられる。

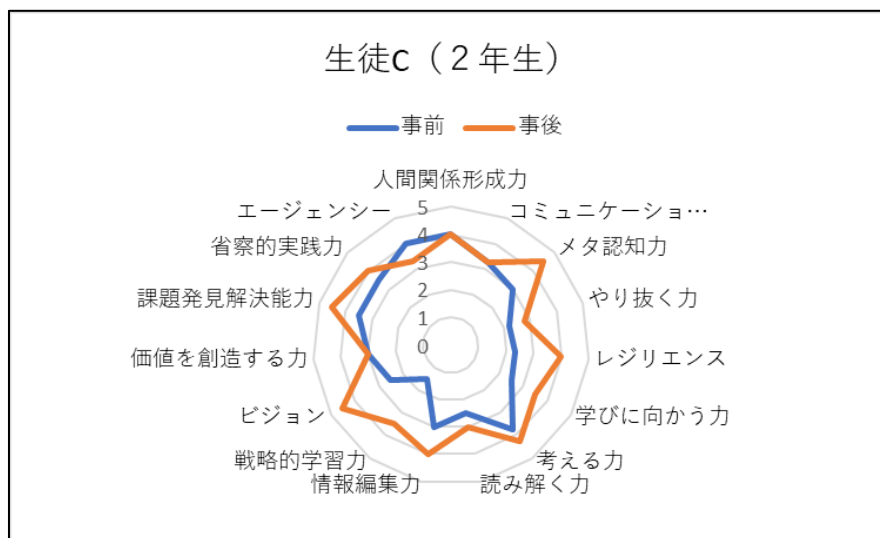


図12 生徒C

・生徒D（1年生）（+0.36）

周囲に流されずに自分の軸を持っている生徒である。各行事や学校説明会では、司会進行役を務めていくなど、1年生の中心的人物となっている。後期から生徒会に立候補して役員として活動をしている。特に「考える力」が伸びているが、キャリア探究Ⅰでチームメンバーを率いながら、答えのないミッションを考えていく上で高まっているのではないかと考えられる。

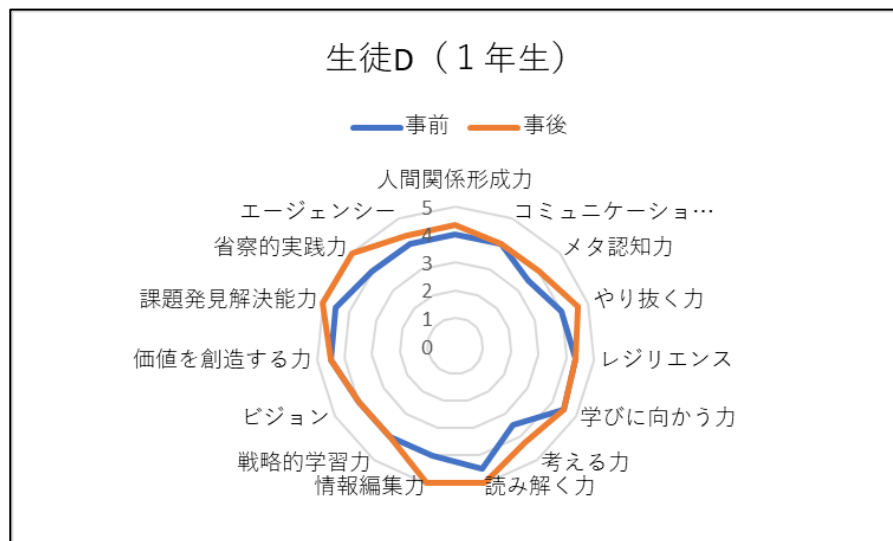


図13 生徒D

・生徒E（2年生）（-0.74）

2年生女子のリーダー的存在である。同級生だけでなく先輩、後輩からも慕われている。後期から生徒会副会長を務めている。今年度は留学への挑戦や探究活動においても重要な役割を担っていった。しかしコンピテンシーの数値が下降している。要因としては、事前アンケートの結果がかなり高かった中で、様々な活動を通し、自身を見つめメタ認知をしていた結果ではないかと考えられる。自己評価の高さを修正していく姿も成長と捉えられる。

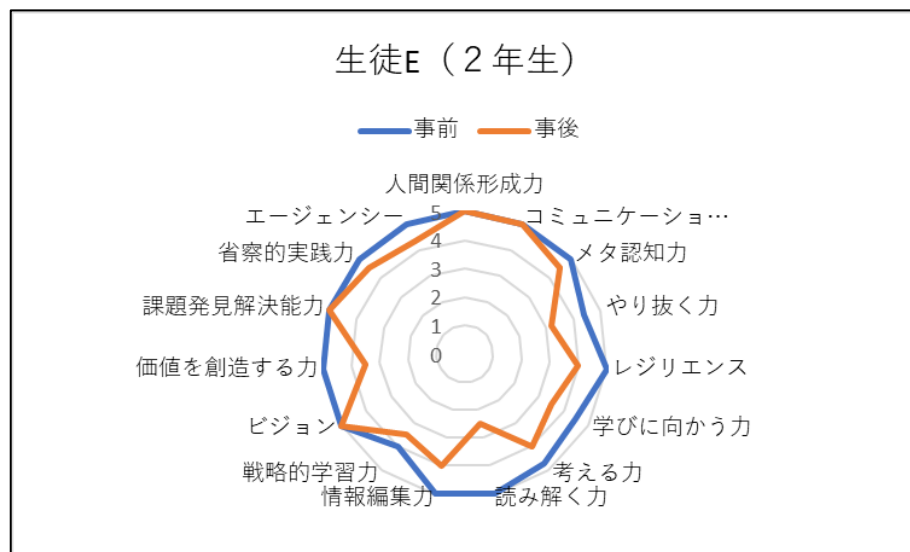


図14 生徒E

4) 全体総評

全体的にみるとコンピテンシーに対する自己評価の変化はほぼなかった。このことは、コンピテンシーへの意識付けが十分になされていなかったことが理由の一つとして挙げられる。そのため、今後はより一層活動の目標設定や振り返りをしっかりと行い、どのコンピテンシーを高めていきたいのか、またどのコンピテンシーを高めることができたのかということ意識させていく必要がある。

また、個人分析では自身の役割を認識し、主体的に活動をしている生徒に関しては、数値の高まりがみられた。しかし、生徒 E のように様々な経験を通して、自己を見つめ直していった結果、数値上は低下した生徒もいた。このことはむしろ自分自身と向き合うことでメタ認知を深めていき、成長に繋がっているといえる。そのため、コンピテンシーの評価については、生徒の自己評価と合わせて、リフレクションやコーチングを通して、教師が総体的に評価していく必要がある。

5.おわりに

昨年度から 21 世紀型教育プロジェクトのメンバーとして、K 高等学校の教育改革に携わり、生徒が社会で活躍できる人材に成長するためには、学校教育の中で、どのような資質・能力を育めば良いのか、そしてその資質・能力をどのように身に付けさせていくのかということなどを常に考えてきた。そして今年度、教育改革を受け実践した教育の中で「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体化させていきながら、生徒一人一人の可能性を引き出していくことの重要性を改めて実感した。また、日々の学校生活や探究活動、学校行事の中で生徒一人一人がそれぞれ成長をしていく姿を多く見取っていくことができた。何よりも熊本キャンパスでは、様々な教育活動の中で「自走していく生徒」が育っていったことが、21 世紀型教育プロジェクトの教育成果と言える。

しかし、15 のコンピテンシーの意識化や定着を全国で推進していくことや探究に関するキャンパス間の温度差など多くの課題がある。このような課題を解決していくために、生徒だけでなく教職員の資質・能力を引き出していく研修の開発や探究科の職員として、ファシリテートの手法や探究学習の楽しさを広めていく役割を担っていく。そして、生徒だけでなく教職員も自分らしく、たくましく活躍していけるように、教職員と生徒が共に成長する「共育」を目指していく学校経営を行っていききたい。

引用・参考文献

- ・ アンジェラ・リー・ダックワース「GRID」

https://www.ted.com/talks/angela_lee_duckworth_grit_the_power_of_passion_and_perseverance/transcript?language=ja (2024 年 1 月 14 日閲覧)

- ・ ベネッセ教育情報「レジリエンス」

https://benesse.jp/educational_terms/7.html (2024 年 1 月 14 日閲覧)

- ・ 環境省「フードドライブ実施の手引き」

<https://www.env.go.jp/recycle/foodloss/pdf/fooddrive.pdf> (2024 年 1 月 14 日閲覧)

- ・ 経済産業省「社会人基礎力」

<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (2024 年 1 月 14 日閲覧)

- ・ 小林 朋子 (2021)「学校教育を活かした子どものレジリエンスの育成—学校危機の予防と回復を支えるアプローチ—」『教育心理学年報第 60 集』

https://www.jstage.jst.go.jp/article/arepj/60/0/60_155/_pdf/-char/ja (2024 年 1 月 14 日閲覧)

- ・ 教育と探求社「クエストエデュケーションとは」

<https://eduq.jp/for-school/quest/> (2024 年 1 月 14 日閲覧)

- ・ 文部科学省 中央教育審議会 (2021)『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）』

https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf

- ・ 文部科学省 (2012)「キャリア発達にかかわる諸能力（例）」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/05/21/1320712_04.pdf

- ・ 文部科学省 (2018)「新学習指導要領について」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2018/07/09/1405957_003.pdf

- ・ 文部科学省 (2016)「読解力の向上に向けた対応策について」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/12/12/1380468_2_2.pdf

- ・ 文部科学省 (2020)「OECD Education 2030 プロジェクトについて」

<https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030->

Position-Paper_Japanese.pdf

・メガスタプラス「2030 年に必要なスキル！？オックスフォード大学研究」

<https://megaplus.ban-zan.com/trivia/p6995/> (2024 年 1 月 14 日閲覧)